医療コラム「未病の憂い」スペシャル

スーパー歯科医「キーパーソン探索記」（前編）

正解なき時代を切り拓けるヒトづくりを（金子）先人も乗り越えた〝歯科医の宿命〟を原動力に（亀井）

金子 譲 東京歯科大学 理事長 × 亀井英志 長栄歯科クリニック 院長

本誌連載中の医療コラム「未病の憂い」―現代版「養生訓」の執筆者・亀井医師（長栄歯科クリニック院長）が、母校の東京歯科大学金子譲理事長と〝歯科の未来〟を語り合う。低迷続く日本社会再生へのヒントも。元気のないビジネスマンへの力強い〝エール〟にも聞こえる――。

――次世代の〝歯科医療〟を見据えた人材育成、研究を主導しておられる金子理事長、臨床医として〝歯科医療〟の今を知る亀井先生。お二方には〝歯科医療の未来〟という点でお考えのところをお話いただければ。

亀井 歯科医療の最前線に身を置き、ここ十年ほどの間に患者さんが求める〝歯科の役割〟その変化を感じています。我々歯科医は現場でやれることは出来る限り進めていますが、歯科大学トップとして金子先生はその変化をどのように感じておられますか？

金子 歯科は、他の診療科と比べ、いつの時代にも一般の皆さんに最も身近な〝お医者さん〟という認識を頂いて今日に至っています。そのため、歯科医の側も、いつの時代にも患者さんの〝新たなニーズ〟に真っ先に出会うケースがあります。患者さんに身近な存在ゆえの宿命です。亀井先生がおっしゃる〝新たな役割〟とは、そのまま歯科医として患者さんの〝ニーズ〟にしっかり向き合ってこられてきた、ということ。近現代の医療シーンで〝歯科発〟の医療技術というものも、少なくないのです。古くて有名なのは〝麻酔〟です。新しいところでは、インプラント。今日の麻酔の原型は〝歯科での抜歯〟がきっかけで開発、その後外科手術へと普及しているし、インプラントも、骨を金属をくっつける（歯科の場合はアゴの骨）という技術は、整形外科などで治療として発展しています。麻酔は十九世紀中頃、インプ

ラントは二十世紀中頃に世に出始めたものです。

亀井　麻酔が世に出始めた十九世紀の後半に日本初の歯科医学校として「高山歯科医学院」（東京歯科大学の前身）が設立（一九八〇年）されました。二年前に「創立百二十周年」を迎え、二〇一三年には、東京・水道橋に学部教育（現在は千葉市所在）など中枢機能移転が完了される、と聞いています。その狙いをお聞かせ下さい。

▼東京歯科大・金子理事長（左）と亀井院長（右）

金子　水道橋移転の狙いはいくつかありますが、一言で申し上げれば歯科教育研究機関（大学）としての「機能充実・強化が目的」です。大学の機能充実・強化とは、すなわち人材育成のあり方をある面でドラスティックに変えられるか、ということに尽きる。歯科大学には教育・研究・診療（臨床）という三つ役割があります。そのトライアングルの中心にはいつの時代にも人材育成がある。水道橋移転は、大学としての〝新陳代謝〟とも言えます。いつの時代も、歯科医や歯科研究者は、旧来の枠組みにとらわれない多様な能力を持った人材が求められています。亀井先生が先ほどおっしゃった新たな役割を担える歯科医の育成は、本学の特色の一つでもあるわけです。

亀井　人の未来を担う歯科医、研究者、先生がお考えの具体的な〝育成像〟をうかがえますか？

金子　一例としては、まず広く先端医療や医療技術の〝担い手〟の育成・充実、さらには、本学が、豊富な人材が集まる先端医療の拠点として、あるいは他の研究機関と共同して先端医療や関連技術開発拠点の一翼を担う存在への進化が目標の一つです。先端医療や技術というと最近では〝再生医療〟などがありますが、社会の皆さんから求められているのは再生医療だけに限りません。研究開発を進めるべきテーマが再生医療以外にも数多くあります。コンピュータの難解な解析力、あるいはバイオテクノロジーの高度な知識、また、歯科で言えば、歯科材料の新素材開発、体に優しい歯科材料の活用法と工学的な高い専門性が必要とされる場面も数多く出てくる。生物学、工学、コンピュータサイエンス、薬学など、歯科とは一見畑違いの分野との共同研究や連携なしに、歯科大学として社会から求められる新たな人材育成というのはますます難しくなっていく。そうしたプロフェッショナル人材同士のヨコのつながりを容易にかつ濃厚なものとしていく上で、東京・水道橋という〝地の利〟を活かさない手はありません。

亀井　私も地方出身で、本学の充実した教育を受けた一人です。臨床の最前線に長らく携わってきた経験で申し上げると、東京という場所は、一人の医療従事者の〝土台〟を育む場として特別な場所だと今でも思います。多種多様な人々、情報が集まる東京で学ぶということは、多様な価値観に触れる機会が圧倒的に増える。それは反面、自己を変えていく（成長させていく）チャンスでもある。本学の先人たちの多くも、東京という場で揉まれ、一人前になった。そういう意味では（水道橋移転は）、東京歯科大学としての〝原点回帰〟とも言えますね。

金子　そうですね。これからの歯科医や研究者は、答えのないテーマに敢えて挑んでいかねばならない場面が増えるでしょう。この状況は、日本での歯科黎明期を切り開き、歯科の普及に貢献した本学の先人の姿そのもの。先人を超えることは、我々後進の義務です。そこを大学としての発展、進化の原動力にしていくことがトップたる私の責務だと思います。　（次号へ）